主名詞提示助詞の使い分け基軸に見る事態把握の変化　上代編

—＜指し言語＞から＜語り言語＞そして係り結び（前接語焦点文）成立へ—

東京福祉大学留学生別科非常勤講師

島　映子

言語の歴史的変化は、［A］言語形式は受け継がれながら、もととなる＜事態把握＞が少しずつ変化していく場合（意味が変化する場合）と、［B］言語形式が変化し、その＜事態把握＞は別の形式の中に生き続ける場合（形式が変化する場合）があると考えられる。本研究は、人間言語に共通する基本的要素である名詞提示と述部提示のうち、名詞提示を担う助詞の使い分けの背景にある事態把握の変遷を観察する。

Reed（1996）は子どもの言語発達の段階として＜指し言語＞から＜語り言語＞へという経路を想定している。本多（2002）はこれを受けて、通時的にも「共同注意的な場面において相手の注意をそれに向けさせる」＜指し言語＞から「相手の前へ投げ出した題目について何かを語るというところまで到達している」＜語り言語＞へという文法化が見られるとしている。共同注意とは、他者と共に同じものに注意を向けることであり、子どもは大人と同じものに視線を向けている時に発せられる言語音から言語を身につけて行く、ということである。その共同注意には、事物自体を求める指令的共同注意と、他者とのつながり（共感）を求める叙述的共同注意があると大藪（2004）は言っている。

また尾上（2006）は、「音声によって自分の心の中にある概念を他者に示すことによって意味を伝える」最も基本的な形は名詞一語文で、名詞一語文は特別な文脈がない限り＜存在承認＞か＜希求＞かいずれかの機能をもつ、としている。そのものが目の前にある場合の発話は＜存在承認＞、目の前にない場合の発話は＜希求＞を示すという事であろう。これは、ちょうど大藪（2004）の言う叙述的共同注意と指令的共同注意に当たる。

本稿は、これらの知見をもとに、「名詞ゾ」「名詞コソ」という形が、＜指し言語＞のそれぞれ叙述的共同注意と指令的共同注意に当たり、日本語の出発点となっていると考え、『万葉集』にその痕跡を求めた。また、「N_1ハN_2ゾ」という＜語り言語＞の形が『万葉集』や『古事記』成立以前の日本語にあったと見られることを示し、それによって、上代の「ゾ～連体形」が「N_1ハN_2ゾ」の倒置であると考えるのが合理的であることを示す。

すなわち、＜指し言語＞の時代は、Nゾ→叙述的共同注意（存在の承認）vs. Nコソ→指令的共同注意（希求）という使い分けがあった。＜語り言語＞が生まれ、N_1ハN_2ゾ→措定判断（語り言語）vs. N無助詞V/A→事実（指し言語）という使用になった。『万葉集』では、「ゾ」は文末判断辞になり［A］［B］、「コソ」は已然形と結び付いて意志・願望から理由・譲歩の節使用に拡張している［A］。上代の「ゾ～連体形」は倒置、「コソ～已然形」は願望・理由・譲歩と読めるものばかりであるが、中古に入ると、名詞取り立て（前接語焦点）の＜係り結び＞という意識が強くなり、ゾ・ナム・コソ→前接語焦点(A) vs. ハ・無助詞→非前接語焦点という使い分けが意識的になる。

＜参考文献＞①大藪泰（2004）『共同注意――新生児から 2 歳 6 カ月までの発達過程』川島書店. ②尾上圭介（2006）「存在の承認と希求―主語述語発生の原理―」『国語と国文学』83-10 :1－13. ③本多啓（2002）「共同注意の統語論」山梨他編『認知言語学論考Ｎｏ2』199－229. ひつじ書房. ④Reed, E.S. (1996). *Encountering the world: Toward an ecological psychology.* Oxford: Oxford University Press. 細田直哉訳、佐々木正人監修『アフォーダンスの心理学―生態心理学への道―』（2000）新曜社.